

《2004年10月例会報告》

【日時】2004年10月8日（金）19：00～21：30（→その後「ルン」～12：30頃台風のため帰宅）

【会場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【参加者（会員）】麻生征宏（学研） 安藤裕一（インターナショナルSOS） 鈴木崇正（NECメディアプロダクト） 田中理恵（(株)日本能率協会総合研究所） 茅野英一（かながわクラブ） 名方幸彦（文京教育トラスト） 中塚義実（筑波大学附属高校） 中村敬（少年サッカー指導者） 両角晶仁（日本スポーツ振興センター）

【2次会のみ参加者】江川純子 川井寿裕 竹中茂雄

【テーマ】サロン2002公開シンポジウム検討会「totoをどう活かすかー地域スポーツ振興のために」

【報告書作成者】中塚義実

注）参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

サロン2002公開シンポジウム検討会

totoをどう活かすかー地域スポーツ振興のために

I. サロン2002における「公開シンポジウム」（中塚義実：資料参照）

1. 「公開シンポジウム」の位置づけと第1回シンポジウム（2001年度）

サロン2002が“ゆるやかなネットワーク”を保ちつつも会員制の組織に移行したのは2000年度のこと。月例会と“出張サロン”、及びホームページを通しての“情報発信”が主な活動であるが、プロジェクトを組織して何らかの働きかけを行うことも当初から想定していた。2000年度の「フットサルプロジェクトI」に引き続き、2001年度には「ワールドカップ・プロジェクトI」が発足し、2002年FIFAワールドカップに向けて、サロンとしてできることは何かを探りはじめた。その中で出てきたのが「公開シンポジウム」である。

2001年度は、ワールドカップのプレ大会でもあった「コンフェデレーションズカップ」の成果を、本大会にどう活かすかをテーマとしたシンポジウムを企画した。開催地となった鹿島、横浜、新潟で何があったのかを、運営側、ボランティア側、市民側の立場で総括したシンポジウムには85名が集まり、懇親会も含め、これまで個々に活動していたサッカー関係者のネットワークづくりに貢献した。

また、シンポジウムの内容を網羅しつつ、特別寄稿やインタビュー記事を掲載した報告書を800部作成し、うち600部は関係部署に無料配布、活用していただくこととした。

シンポジウムは参加者からの参加費1000円で運営し、報告書は一口5000円の賛助金（4口以上は広告掲出）で制作、不足分を全体会計から捻出した。初年度は5万円の補助で全て運営できた。演者もスタッフも、基本的には全てが会員の自主運営で行う形式は、その後の「公開シンポジウム」のひな形

となった。

2. ワールドカップイヤーの公開シンポジウム（2002年度）

第1回シンポジウムが好評だったこともあり、ワールドカップイヤーには2つのシンポジウムを、東京と神戸で企画した。ここでもプロジェクトを組織して運営にあたった。

内容的には非常に興味深いものであったが、6月末までワールドカップの喧噪の中にあって準備に取り組むのが遅れ、告知も行き届かず、参加者は当初の見込を大きく下回り、全体会計からの補助が倍増した（約11万円）。特に神戸会場ではJリーグ開催日と重なり、本当に期待人が参加できないこともあり、日程面の調整が今後の課題として残った。

報告書作成も前年度より大幅に遅れたが、年末には400部完成し、関係部署へ300部を無料配布、残部を500円で頒布した。

3. ワールドカップ後の公開シンポジウム（2003年度）

2002年までは「ワールドカップ」という求心力を保つことができたが、大会後どうするかは大きな課題であった。しかしながらサロンは当初から「21世紀のゆたかなくらしづくり」を“志”とするネットワークであるので、次の課題はすぐに見つかった。総会の議論の中で「地域で育てる」ことがキーワードとして定まり、この年も夏にシンポジウムを開催した。

しかしながら、2002年度に引き続き、内容的には非常に充実していても、準備が遅れ、告知が行き届かず、また日程的にも難しく、参加者は27名にとどまった。

報告書作成も後手を踏み、できあがったのは2月末。400部作成して224部無料配布、残部を頒布した。

4. 公開シンポジウム運営の原則

サロン2002の“Give and Take”の精神を踏まえ、これまでの経緯を鑑みて、次の点を運営上の原則として確認したい。

1) シンポジウム・報告書作成ともに会員の自主運営の範囲内で行う

- ・外注しない … 自分たちのことは自分たちで、できる範囲で行う
- ・演者を含めてスタッフは会員を原則とする
- ・収入は、シンポジウムは「参加費」（1000円）、報告書は「賛助金」（一口5000円）
- ・演者謝金は月例会並（10,000円）、テーブル起こし謝金も月例会並（約2時間で5,000円程度）

2) シンポジウムの「事務局長」と報告書の「編集長」を置き、運営サイドのリーダーとなってもら

事務局長は置いていたが、編集長を置いていなかったのも、代表者に負担がかかっていた。これをしっかり置くことで、小回りのきく準備やまとめができるはず。

II. 2004年度の「公開シンポジウム」について（ディスカッション）

1. 本年度のテーマ設定について

中塚：本年度は、前年度の「地域で育てる」の続きで、地域で育てるためにはどれくらいのお金が必要なのか、クラブ運営やイベントの開催にはどれくらいのコストがかかり、それを現状ではどうやって工面しているのかを明らかにしつつ、「t o t oをどう活かすか」という話に持っていきたい。ワールド

カップ後どうするか、「地域で育てよう」というのが去年出てきたことで、大きな流れとしては、去年の続き。総会で出たのは「t o t oをどう盛り上げるか」というところへ持っていきたいのだが、その議論の中で「スポーツにどれだけお金がかかるのか」「どういうところがささえきれていないのか」という話をした上で「なぜt o t oがいるのか」という、“正攻法”の議論でいきたい

両角：t o t oをどう盛り上げるかについて、「こうやったら売れるよ」「こういうくじなら買うよ」という議論は、皆が言いたいことを言えるし面白いが、非常に拡散する。メールや手紙でいろんなアイデアもいただくが、我々もぼーっとしているわけではなく、いろいろ考えているので、これまで、目から鱗というほどのアイディアは残念ながらない。会場から出てくると面白いとは思いますがシンポジウムとして成果が得られるかどうかとなると…。現状こうなっていますというのを冒頭でプレゼンすることは必要か。売り上げの現状、次期の試み、議員連盟の流れから移行の話、当たりやすいくじやインターネット販売を考えていることなど。

鈴木：それは必要。t o t oについて、議員立法してあがってから今までの経緯を正しく皆が共通認識として、制度や背景を正しく把握することが必要。現象面だけがメディアに出ている。背後にある仕組みや理念を正しく理解し、それをベースにしないといけない。使われ方は誰がどう決めて、スポーツ振興基本計画とのリンクはどうなっているのかを正しく理解された上での議論にならないと、単なるアイデア言い合い合戦になってしまう。

両角：t o t oとは関係なく、もう一つの切り口として、総合型地域スポーツクラブの成功例を紹介してもらおうというのもあると思う。5年前のJ C Yのシンポジウムでは、かながわクラブの話が紹介されたが、そういう進め方もある。「そこで実はt o t oも役に立っていました」という話。そういうつながりはあるのではないか。1年目に60億ぐらいの助成金を出しているが、一つのクラブに数千万払ってクラブハウス新築事業に助成した例もある。当時は、いずれ800億、1000億と売れていくという甘い見通しの上に立って出したのだと思うが、今だともったいなくて、6000万もあれば芝生のグラウンドをもっと作れたなと思う。

中塚：クラブハウスを建てるにはどれくらいお金がいるのか、芝生のグラウンドつくるのに、都心と田舎とではどれくらいか、年間維持費はどれくらいかかるのか、よく知らない。スポーツにどれくらいお金がいるのか、本当のところはわからないのでシンポジウムの中で引き出したい。

鈴木：スポーツ振興との関係で言うと、どういう風に申請し、もらいたいといっている側と配分する側とのリンケージをテクニカルな部分を含めてどうやっているかは紹介できる。そこが一つのステップで、ふくらむところではないか。その議論をうまくコントロールすれば、かみ合う

2. スポーツ振興にどれだけの公的資金が注がれているのか

中塚：t o t oができたからスポーツ振興の予算が減ったという話を聞いたことがある。小さな自治体で、これまでついていたお金が、t o t oができたからいいだろうということでなくなり、t o t oの売り上げも上がらないためにかえって減ってしまったという話。

両角：国費ベースでは、どう捉えるかの話。文部科学省は減っていないと言っている。ナショナルトレセンやJ I S Sなど、大きな予算も含めて言っているので、地域スポーツの分は減っているかもしれない。ユーザー側に入っているのは実はすごくいっぱいあって、国土交通省の公園整備事業のスポーツ施設整備があったり、農水省の農村活性化があったり、多岐にわたっている。各省が既得権益を離すことにはないと思うので、t o t oができたからと言ってそういう予算を減らしていくことはありえない。具体的に何の部分が無くなってきたのか分からないと議論にはならない

中塚：そういう議論をするために、スポーツ振興のお金は一体どこから出ているのかをちゃんとおさえないとだめ。一つは文部科学省がスポーツ振興の所管。その流れでt o t oがある。それに加えて農水省もやっている、国土交通省もやっている…

両角：麻生大臣が「国民スポーツ担当」になっている。宝くじを予定しているらしいが、これは見方を変えると一村一品運動みたいに、花園や国立や甲子園のような地域のメッカを全国につくろうというのを、国土交通省でなく、麻生さんがやるということらしい。

中塚：「国民スポーツ担当」はどこかの管轄になるのか

両角：基本的には文部科学省だが。

中塚：現場にいてよくわからないことが時々ある。外部コーチの謝金が出てきたときに、一つは文部科学省からの部活動の活性化、もう一つは厚生労働省から雇用対策の形で出ているという。東京都では二本立てになっているという話を聞く。どういったお金がスポーツに注がれているのかの全貌がますますわからなくなる。t o t oの話は全貌の中のごく一部の話なのか、という気もしているが。

両角：国の補助金は、基本的には全て補助金総覧に出ている。調べようと思えば調べられるが、非常に大変な作業になる。t o t oは、今年度、今のペースで行くと160億程度で、助成金はほとんど出ない。16年度もゼロだったが、当せん金の時効金や交付内定しても執行残を出す団体があるのだから6億円ぐらい助成した。来年はおそらく、出せたとしても2～3億。今年も、芝生化、クラブハウス事業には出せていない。基本的には競技力向上の方は300億の基金を持っていて、そちらも金利がこういう状態なのでシビアにはなっている。日本中でどういう財源がどのくらいあるのかというのは、私の方で調べればわかる。あと現場の方で、このくらいのクラブを維持して活動していくためにどのくらいのお金が必要かという話が必要。かながわクラブは今も助成を受けていましたか。

茅野：最初にいただいたときの約束で、3年目になっても若干いただいている。

両角：本当は立ち上げ支援みたいなどころがあるが、もともとt o t oがないときにも一人前に運営されていた。本当はかながわクラブにあげなくてもよかった（笑）

3. かながわクラブにとってのt o t o

茅野：総合型の定義は多種目、多世代、技能の多様化。3つの要素と言うが、うちの場合、多世代と技能の多様化はできていたが多種目が達成できていなかった。おかあさんやおじいちゃん、おばあちゃんを入れてということになると、サッカーだけでは厳しい。アウトドア系のニーズはあるし、子どもの健全育成とか、できることなら家族単位で入ってもらいたい。そこで多種目をやっていきたいということは念願でもあった。t o t oは多種目化を図る上でずいぶん使わせてもらった。新しくペタンクの用具を用意したり、イベントができるようにテントを買わせていただくとか、赤字覚悟のスキー教室を企画するなど。数十万の赤字が出るのがわかっている企画することはできない。t o t oの助成を受けていなかったら企画できなかった。助成を受けている間にノウハウを培っていきこうということで踏み切ることができた。t o t oの補助金は傾斜配分で、年ごとに8割ずつ落ちてくる。なくなるときにはペラインに乗せるか、乗らなかつたら切り落とす。

名方：事業ごとに使い道も決まっているのか。

茅野：申請した事業を実施する。昔だったら行政がやるような地域のスポーツ大会を年2回開催してみるとか、お金のことは気にしないでまずやれることをやろうという取り組みができた。

名方：受益者負担はどれくらいか

茅野：4万いくら。補助金があるから負担を押さえるというやり方をしてなくなった瞬間に上げてしま

うようなことをするとだめ。長続きしない

名方：申請するとき、補助金は入ってもバランスよくやりなさいという言い方をされる

茅野：最終的にペイラインに乗ったときにはこのラインでできるはずというところで、参加者からいただくようにした。

両角：キーワードを、例えば「地域スポーツクラブと財政」みたいなことにするかどうか。「財政」としたとたんに、t o t o はほんの一部となり、ちょっと控えめな露出となる。「かつて多少はお手伝いしました、今でも細々とお手伝いしています」という（笑）。実際に現場の方は、いま茅野さんがおっしゃったようなことを聞きたいのではないか

4. 補助金をめぐるあれこれ

名方：補助金もらうと大変ですよ

茅野：うちはスタッフの中に税理士がいるから、毎月来て帳簿を見てもらっている。本来NPOの法人報告書と科目勘定が違う。t o t oの方が単式で整理しているから、それを事業ごとに全部整理している。NPOの、公益法人会計基準をベースとしたものとは科目の立て方が違う。それはしょうがない。

名方：文京区の社会福祉協議会の運営委員会で言ったのは「アワードにしる」ということ。今どうなっているかわからないが、懸賞を出して活動を審査して、よければあげる。120万ぐらい。そうすると使い道は自由。実際のところ、補助金は大変。数字をしっかりと出さないといけない。もらった前提での試算と、実際にいくら入って売り上げいくらぐらいか、受益者負担をどうしようかという実際のものを別につくらないといけない。本当はアワードのように、自由に使っていいですよ、その団体なりその事業を信用してますよというのがいいのだが、それはできない仕組みになっている。

両角：それはできませんよね。NPOが100%信頼できるかというのがありますし。我々も、自分のお金だというのではなくて、やはりお預かりしているお金という意識がありますから、きちっと出していきたいし。以前、JOCの加盟団体がダブルで申請していて、会計のチェックが甘くて二重にもらっていたということがあった。ああいうことがあると困る。チェックはきちっとしなくてはいけない。かといってあまりぎちぎちにやってしまうと使い勝手が悪い。バランスの問題。

茅野：地域のクラブをめぐる補助金にはいろんな要素がある。外部コーチについては、文部科学省からの補助金を都道府県でつくり、手を挙げた市町村に交付して市町村が外部コーチを雇う。神奈川県では37市町村のうち、外部コーチを雇おうとしたのは半分ぐらい。それでもちゃんと出ている。もう一つは昔の労働省の補助金。あれは失業対策で、6ヶ月間の短期雇用をつくり出そうという基金。一番よく使ったのは道路清掃と川の草刈り。6ヶ月で切らないといけない。6ヶ月で必ず事業を切って、新しい事業をたてて新しく雇い直してまた6ヶ月というのならいい。部活動のコーチにしたのもあるし、ITがらみの講師の派遣に学校に入れたところもあった。スポーツをめぐるっては、様々なところからお金が来ている。例えば横浜市は市民活動の助成を行っている。ボランティア団体が部屋を借りたり光熱費の補助しようという助成。NPOの法人格を持たなくてもよい。学童のための親の会であってももらえる。市民団体だからもらえるようなものはけっこうある。神奈川県でも基金をつくっていて、アワード方式のものもある。実績を上げたところに50万とか100万の金をあげる。これは賞金であげるので、何に使ってもいい。次の活動のステップにしてくださいということで、期待を込めてあげる。補助金もらってどうやって割り振るかという計算の難しさから解放されて、あげた実績によってさらにこの団体は続くだろうという期待感であげた方がいい。小規模団体の助成について、アワード方式はありだと思う。これは補助金ではなくて賞金。これまでごくろうさまという感じで渡す。

名方：小規模団体だと 10 万、20 万でも助かる。

5. スポーツを統括するのは？

茅野：いまスポーツを統括しているのは文部科学省。都道府県庁においても教育委員会のスポーツ課、昔だったら体育課が所管しているのが通例で、これまでは例外はなかった。ここ 1~2 年の動きとして、3 県ぐらいが知事部局へスポーツ担当課を持ってきている。これまでのスポーツは、学校スポーツと、学校を出てからのノンプロの企業スポーツしかなかったけど、その後にある生涯スポーツの層が広がってきている。これまでは、学校を出て就職したらノンプロ以外はスポーツじゃなくて、そうすると魚釣りをするかゴルフやるかしかスポーツらしいものは残っていなかった。そのような中で、それをターゲットとして何かやろうとすると、教育委員会で所管しきれない。ということで、正確な数字は忘れたが、3 団体ぐらいが県民を担当する部局、すなわち広報公聴をやったりするようなセクションに、スポーツのセクションを持つところが出てきた。さらにそこに、公園部門を持っていくのがいいのではないかとされている。スポーツの現場は、学校を除くと公園。スポーツ課や体育課が所管している施設はない。本県でいうと体育センターだけ。そこがグラウンド何面かと陸上競技場を持っているが、たとえば三ツ沢サッカー場は、緑政局という公園を担当しているところが持っている。横浜国際、今度日産スタジアムになるが、これはもともと緑政局が持っている。しかも根っこの土地は河川事業でやっている。鶴見川の氾濫原。絶対氾濫しないようにスーパー堤防をつくった。それをつくることによって中にこうすいじきができる。そのこうすいじきをかり集めてスタジアムをつくった。あそこに行くと、実は、スタジアム全体が中 2 階に浮いている。あのスタジアムは地面に建っていない。橋脚の上に乗っている。なぜかという、あふれたときに全部水が入るようになっているから。あそこを埋めてしまったら遊水池としての機能が失われる。あそこは建物が建たない土地で、洪水時に水があふれるようにつくっている土地。そこに人が建物を造ると全部冠水しちゃう。駐車場すらもう一段上につくっている。サブトラックの芝生は埋まってもいいという前提でつくってある。ただし、横につくってある施設は、建物の中に水が入らないように、全部防水扉でつくっている。話があちこちに飛ぶが、将来的に地方自治体レベルで言うと、県民向けの部局でスポーツ行政をやるのではないか。そこに公園部門を持ってこないと一元的な管理ができないのではないか。という議論は、市民レベルからそういう声が上がっている。

名方：隣の公園で活動しているが、文京区という地方自治体では土木課が公園を管理している。そこはスポーツは関係ない。市民の人が自由にやってくださいと書いてある。その代わりみんなで調整しましょう。本来それでいい。しかし東京都があり、国がある。国が「居場所づくり」という予算を 70 億つくった。国から東京都におり、東京都には文京区から申請する。うちは文京区に申請したが、「居場所づくり」だから公的な場所を使って活動できると思ったが、場所は確保されていなかった。調整は自分たちでしなさいということだった。全ての学校に電話をかけて聞いたが、すでに地域の団体が使っていて使えない。市民レベルからすると窓口がいっぱいある。一つでいい。チェックするところを一本化しないと余りにも複雑。むしろ民の発想をいかに出し、それを行政が調整するというのでいいのではないか。t o t o についても、誰がどこに出すかを決めているのか。

両角：t o t o については全部外部の審査委員にお願いして決めている。審査委員も公表している。地域スポーツクラブのところは水上氏がきわめてディープに関わっている。水上氏や黒須氏に関わってくれている。信頼できる審査だと思っている。どこにいくらというのも公表されている

茅野：3 年間で徐々に減っていくという発想も、従来の役所の発想だったらそうはならなかっただろう。総合型の補助金も、なくなったとたんに終わってしまう。地域クラブをめぐる財政問題は、取り上げる

には大きすぎるように思う。t o t oに大きな夢を抱いている。これからt o t oは盛り返していくだろう。盛り返していくt o t oをどういうふうに使ってほしいのかをサロンとして発信していくのは、相当時宜を得た企画になるのではないか。まさに巻き返し。両角さん返り咲きの意義もそこにある。

両角：地域スポーツクラブの運営にはどれぐらいコストがかかって、老舗のクラブではどういう風に変遷してきたかは、茅野さんがやってくれば一番いいが。

中塚：茅野さんのところはt o t oの助成をもらう前から運営できていた。それは、一つにはクラブユースからの委託金があったがベースは会費だろう。と同時に、ボランティアスピリットがベースになっていることもあると思う。本来なら、仕事に対する支払いがあってもいいものを、支払わないまま、小さなサイクルで回していることが、地域のスポーツを展開する中で非常に多いのではないか。そこにもっと光を当てるような情報発信ができないか。

両角：どういうことですか

中塚：例えばゲームするとき必ず審判は必要だが、2軍戦などではけが人や試合に出られない者がやるのが依然として多いのでは。本当は、審判は最も大切な存在で、高く評価されなければならないのに、日本では不当に虐げられ、その地位までもおとしめて約100年間来てしまっている。このようなことが他にもあるのではないか。スポーツとお金をローカルレベルで取り上げる一つのポイントは、「本当はこういうところにお金をかけるべきだ！」ということをクローズアップする意義がある。まあそれを言い出すとお金をもらわないと仕事やらないやつが出てくるかもしれないが

両角：シンポジウムのコンセプトづくりが必要。

6. シンポジウムのコンセプトー地域スポーツの振興とt o t o

鈴木：財政問題だけで各論に入りすぎると、現場でやっている人はわかるが、わからない人が多くなる。理屈としてはわかるがイメージできない。少なくとも消化不良を起こさない程度に、日本のスポーツの仕組みについてのイメージを持たせないと、お金、財政の問題に結びつかない。それが欠落したt o t oだと消化不良に陥る。「お金がない状況でどのように分配するか」という話は、暗い話に終始してしまう可能性がある。そこをブレイクスルーして、前向きにベクトルが向くことが一つの柱として必要。それが成功事例なのか、少ない原資なりにやっている事例で、もう少しあったらこのようにするのになという議論なのか。

両角：例えば、地域クラブの話をしなから、ある時期公的な資金援助を受けた。t o t oの助成も受けたがこんなことになっている。いま、国全体として公的援助はどうなっているのか、という話になって、国はこうなって、t o t oはこうなってという話なら、話の流れとしてはいける。どこかから持ってこないで、最初からt o t oの話は唐突かもしれない。

中塚：最後は、みんなでt o t oを盛り上げようということに持っていきたい

茅野：かながわクラブの事例は、5年前ならよかったけど、いま取り上げてもらうのは違うかなという気がする。いいときにいいものをもらっちゃって、そのとき名前も売れて。うちは安定感があって安心してもらえたのではないかと思う。

両角：例えばクラブネットにかんでもらう

中塚：クラブネットには告知の段階でかんでもらうという話は総会で出た。演者候補としてかながわクラブの名前も出たが、成岩の名前も出ていた。しかし成岩はt o t oの助成はもらっていない。

両角：成岩はモデル事業でもらっていて完結している

茅野：地域クラブの成功事例を挙げて論じる時期は過ぎたような気がする。もう少しマクロで捉える必

要がある。先進事例ではなく、地域クラブの置かれている実態を取り上げるのが大切。5年前は、こういうのがある、いけいけで取り上げてよかったけど。そういう生のレポートこそが求められている。NPOをとったスポーツクラブだけでもすごい数。そういうのが置かれている状況のレポートがほしい

中塚：成岩へ行ったときに、奈良の福西さんのクラブがいろいろ苦勞されていてNPO化したという話をしてくれた。そういう実際の話をしてもらうのがいいかもしれない。あるクラブの状況の話をきっかけに、国のスポーツ振興政策の状況からt o t oの話は面白いと思うが、別の観点から言うと、助成金をもらいたくてももらえないところ、たとえば会社組織でやっているところの話題もほしい。サロンの仲間というセリエやクラブハウスのような。彼らは株式会社でやっているが、彼らがイベントをやってくれることで非常に草サッカーが盛り上がる。こういう状況もシンポジウムで取り上げたいと思うが、そうするとt o t oから離れていってしまう。スポーツ振興の話に主眼を置くのか、それともt o t oに主眼を置くのかを決める必要がある。

両角：スポーツ振興といってもオールスポーツじゃないですね。地域スポーツでやるんですね。地域スポーツに民間がどうサポートしているのかが打ち出せればいい。真ん中に地域スポーツがあれば、財政支援ではt o t oがからむし。しかし、本当にスポーツ振興が目的でイベントをするのか。昔でいうと企業メセナということでやるのならいいが、そうでない目的で、もうからないことがわかっている事業をすれば背任罪ではないですか（笑）

中塚：もちろんもうけようと思ってやっていると思いますよ（笑）。それがもうからないだけではないか。

両角：もうからないのはうすうす気づきながらやっていくことが地域スポーツのためには必要かもしれない。基本的には、民間だから、もうからないとできないと思う。その利幅が大もうけなのか少ないのかは別にして。

名方：日本の企業の8割はもうかっていない。ほとんど国と同じ。雇用補助機関のようなもの。両角さんの話のように資本主義に徹底すればもっと変わってくると思うが。話を聞いていて思ったのは、t o t oが何だということを掘り下げていくと、いろんな問題が見えてくるように思う。例えば、スポーツ団体への寄付と地方公共団体と国庫納付金の3つに分かれているが、なぜそうなっているのか。しかも今までこれまで出ていたけど今はない。そのあたりを掘り下げればいいのか。t o t oについてもギャンブルというものについてどう考えているのか。人々がスポーツに対してどういう意識を持っているのかも見えてくる。

名方：寿司屋へ行くと、典型的に野球。それが一つのサロンで憩いの場。サッカーはそういう雰囲気じゃない。新しい若者がt o t oを通してギャンブルに入っていく、新しいスポーツ文化の話ができれば面白いと思う。そこで、いろいろなアイデアを考えているという話ができれば面白い。

両角：あんなくじ、こんなくじという話は、言っている方も面白いのは面白いと思うが…

茅野：競馬、競輪は、賭け事のためにやっているが、スポーツとして成立しているのにそれに賭け事をやるのはt o t oだけ。スポーツをする者とする者の他に、推理する、賭けることが加わる。賭けてこそサッカー文化があると思う。賭け事だ、ギャンブルだという側面で行ってしまうと前向きのもがないけど、飲み屋でサッカーをみながらt o t oの行方を語るというところにサッカー文化があるというところが出てくればいい。

名方：最初は野球オヤジも買っていた。けど勝ってから買わなくなった。やり方があったかもしれない。あの時、オヤジの文化に根付いたかもしれない。

鈴木：目線を低くすると、くじは楽しいから買う。t o t oを盛り上げようということで。今出た議論

の大半は、t o t oが必要だから、お金が必要だからということ。楽しいから買うという側面もある。しかしその側面を、ああしたらいい、こうしたらいいという話で終始するのは、両角さんが言われたようにあまり意味はない。両角さんにしていても「ふーん」で終わってしまう。一つは地域の、グラスルーツ的な活動にお金が使われるべきであるという側面。もう一つは競技の強化面もある。例えばアーチェリー協会でもハンドボールでもグラウンドホッケーでもいいけど、競技力向上にどれだけt o t oが役立っているのかということについては議論の外でいいのか。

中塚：それがt o t oを中核に据えたシンポジウムにするか、地域スポーツを中核に据えたシンポジウムにするのかの分かれ目になるだろう

田中：それによってシンポジウムに来る層も違ってくる

名方：もともと想定されたターゲットはどういう方か

中塚：絞り込んでいないのでこの場で絞りたい。今まではテーマ設定の問題というよりも告知の不十分さのために、参加者数は少なかった。サロンのシンポジウムは、サロン会員のようなコアな方が来る。

鈴木：研究者や学生さんも来る

中塚：100人ぐらいは呼びたい

麻生：会場は100人ぐらいは入れる

両角：告知はネットとかそういうことか

麻生：チラシにして渡してもらうこともできる

両角：会場はオフィシャルに借りているのか

麻生：安松先生の関係で使える。

中塚：会員以外の方が来る場合は、一つクリアしなければならない手続がある。公開シンポジウムの場合は誰が来るかわからないから。だがそれもOKはもらっている。

7. シンポジウムの方向性

中塚：競技力向上にt o t oがどう貢献するかというのは、t o t o的には大事なことだし、スポーツ振興を広く捉えた場合にも含まれるからいいと思うが、これまでのサロンのシンポジウムの流れ、および我々がメインに据えているところを考えると、地域スポーツを柱にした方がよいと思う。地域スポーツにt o t oはどう貢献するのか、セリエやクラブハウスなどの民間のイベント業者はどう貢献するか、地域スポーツを地域で支えていたクラブはどんな課題を持っていてどんなところでお金がほしいのか、あるいは、地域スポーツの一手手前にある学校は、地域スポーツにどう貢献するのか。そんな中で、「おーいt o t o、がんばろうぜ!」というような持って行き方ができないかと考える。たぶんフロアから、マイナースポーツにt o t oはどのように貢献してくれるのか、競技力向上にどのように貢献するのかという話は出てくると思うが、あくまでもフロアからの質問としてであり、シンポジウムのメインには今回はならないと思う。そろそろ骨格をまとめていきたいが…。今年バージョンをつくって早いところ告知したいのだが

両角：いま総括っぽく言われたが、地域スポーツを中心に置いて、学校教育と民間企業と地域スポーツクラブがどういう風に関わっているかというのをそれぞれ誰かがきちっと話せますかね。例えば地域スポーツクラブで茅野さんがだめだとするなら、別のところを考えないといけないし。t o t oの助成を受けている都内のところをいくつか声をかけて薄謝で来ていただけますかというところを探すことはできると思う。そういうところはPRにもなるし。豊島、文京、板橋あたりで、立教でやれるんだったら願ったりかなったりというところもあると思うし。学校教育では中塚先生がやれる。学校教育と地域

スポーツの実践を踏まえて。民間スポーツは本多さんなり徳田さん。あとは地域スポーツがそろえばメンツはそろそろ。詰まるところお金だよ、みんなでt o t oを応援しようとなると非常に都合がいい(笑)

鈴木：企業というのが引っかかる。セリエとか、クラブハウスとか、どうなのかなあ。俺たちはよく知っているからいいけど、受け止められ方が問題。

中塚：僕のイメージでは、ずいぶん前の月例会で、毎日コムネットの脇田さんが話してくれたことがある。テニスの白子の次に都心部の学生を連れて行けるような合宿地はないだろうか。合宿地と、合宿に値するスポーツはないかとなったときに、波崎に沢山土地がある、Jリーグがはじまるのでこれからはサッカーだということで、波崎の宿のおっちゃんに話をし、芝生のグラウンドができて、広がって行って今の状況になっているという話を聞いたときに、民間企業ってすごく草サッカーに貢献していると思った。たぶん本多さんのところも徳田さんのところも似たようなことをやっている。僕らはわかっているからそうやって言うが、そういう開拓の物語を語ってくれるかどうか

鈴木：貢献している部分と限界はある。事例としてはあるが、それがt o t oがんばれとどう結びつくのか。サッカーの場の提供としてはあるが、それはt o t oの助成を待っているような状況と次元が違う。t o t oとどう結びつくか

中塚：これは想像だが、民間企業の周りに、組織としての弱小クラブ、まだチームにしかかなり得ていないところがいっぱいあると思う。民間イベント業者サイドから見たときに、こういうところにもう少しお金が行き渡ればもっといいクラブになるのに、長続きするのにという事例を彼らはいっぱい持っているような気がする。おそらく学生が中心にやっているところは卒業したら終わり。けど、同じ学生がつくったチームなのに、なぜユベントスはあんなに長続きするクラブになり得たのかという話は取り上げたい

8. 演者その他

両角：日本サポーター協会ももらっている。スポーツネットワーク活性化事業、175万円。

名方：サポーターも面白い。結構出ていますね

両角：t o t oを前面に押し出すかどうかだと思ふ。見かけ上は脇にあつて、終わってみたらt o t o大事だよなと思ってくれるような。

中塚：地域スポーツを中核に据えて学校教育がどうささえるかという話になったときに、一つは学校が沢山持っている施設をどう活かすかという話になると思ふし、あとは学校を卒業した人がスポーツを楽しむようなスポーツ教育になると思ふ。でもその話だと、t o t oと関係なくなっていく。最後の落としどころはt o t o。

両角：私はこだわってませんからね(笑)

中塚：私がこだわってるんです(笑)

鈴木：スポーツ振興や、t o t oに詳しいジャーナリストはどのなの？

両角：大住さんでも二宮さんでも、女性だったらヨーコゼッターランドでも

名方：あの人文京区ですし

鈴木：たとえばt o t oに関する両角さんの講演があるとすると、客観的なものの見方として、大きな状況から、自分が取材した個別の例まで結びつけて短い時間で知見を広めてくれる人がいたらいいのではと思った。それと個別のクラブ担当者の切実な例が出てくればバランスがとれる。企業ももちろんいいし、インパクトはあるが、当事者ばかりが並ぶと個別例ばかりになる。別の角度からの指摘があると

よい。

両角：外部の人を呼ぶとすごく大がかりになる

中塚：最初に言った運営の前提から離れてくる。会員の自主運営の範囲で行う。今日はどこまで詰めますか、事務局長。

麻生：来週いっぱいには案内を出せるようにしないと。

両角：B&Dの内田さんはどうか。スポーツ量販店がささえる地域スポーツということが言えるのかどうか。ただし、その手の話は企業のプロモーションなのかそれとも社会貢献なのか難しい。

中塚：中心には地域スポーツを据える。最終的にはt o t o大事。t o t o大事の言い方として、必要というのと、楽しいというのと両方持って行って、オープンエンドで終わりたい。地域スポーツを育てるためにはこんなところにお金があるんだよ、こんなところはボランティアベースでやっているけど本当はすばらしい活動なのでもっとみんなでささえてあげましょうねということを経験の中でいっぱい出して、それをどこでやるの、t o t oやないかというところへ行くといい。どうですか事務局長

麻生：それが自然な感じがする。来る人でわからない人がいる。今回100人の場所と言ったのは、学生に来てもらいたいということ。学生の中にはいずれNPOをつくる人もいるかもしれない。t o t oも含めて入口だけでも知ることは重要だろう。そういった部分をしっかりと押さえない。知っているけどよく整理できていない人もいっぱいいると思う。おさらいも含めてもう一度整理したい。基本的な確認だけして、両角さん以外には、地域のところと民間のところと2人いればいいのではないかな。それぞれ20～25分ぐらいのプレゼンができる。

両角：地域スポーツクラブの役割、活動そのものを紹介してもらえばいいというイメージか。こんな活動していて会員がこれくらいいてコストがこれくらいかかるというような活動報告でいいか。聞いている方の親近感があるということだと、都内の方がいいか。

中塚：小さなこだわりだが、外注しないということでシンポジウムもやっていきたい。奈良の福西さんとか。t o t oの助成をもらっていないかもしれないが。親近感ということだと、地理的に近いこともあるだろうが、サロンの名簿で知っている人がしゃべる方が親近感がある。その人となりがわかっている。

両角：そっちでいければその方がいい

中塚：演者としては地域クラブの方、企業として草の根スポーツに関わっている人、そして両角さん。3名に出てもらえばいい。積み残しのところは場所を変えてやりましょう。

注) その後ルンにて議論は続き、両角さん、徳田さん(セリエ)、福西さん(NPO法人ポルベニールカシハラスポーツクラブ)に加えて、岐阜経済大学の高橋正紀さん(NPO法人スティックルボックススポーツクラブ)に演者を依頼することになり、すべての方からOKの返事をいただいた。

以上